いだてん 韋駄天の記

劇作家 岡部耕大 ⑭

古民家再生に10年

あっちに10万、こっちに20万と小遣いをためては知覧の家を直した。10年越しである。知覧の建設会社や大工の棟梁、その仲間たちが手弁当で協力してくれた。仏壇も直した。知覧の隣町川辺は仏壇の町であった。軒並み仏壇屋である。まだ古民家再生は流行ってはいなかった。わたしは古民家再生の奔りであった。病院から帰った義母の喜ばんことか。義母の葬式も家から送った。

伊万里の渚窯で焼いた陶器や対の鬼の面が家を飾った。知覧の人はわたしの趣味を知っていて囲炉裏を造ってくれた。自在かぎは神奈川のわたしの家から運んだ。趣味で自在かぎを集めていた。義母の妹にあたる叔母さんもあれやこれやと手伝ってくれた。この叔母は特攻隊を見送った女学生「知覧なでしこ隊」の一人であった。舞台の材料になる話をいっぱい聞いた。その叔母さんも去年の8月に亡くなった。

去年の8月は執筆やら映画の準備と多忙で、松浦にも知覧にも帰れなかった。長男の大吾と仲間の家族が知覧に帰った。東京から車だそうである。大阪からはフェリーで、志布志港から知覧まで車を飛ばす。桜島や池田湖の大ウナギを見物して知覧へ入る。池田湖にはイッシー伝説がある。ネス湖のネッシー伝説に似ていて、実際にイッシーに遭遇した人はいない。

「わたしは神を信じない。しかし、神の神は信じる」。これも西部劇の台詞だったか。黒澤明監督の「七人の侍」も西部劇になった。「荒野の七人」である。ただ、まったく違った。「荒野の七人」はいったんは逃げる。「荒野の七人」には侍の情がなかった。侍の情とは「自己を犠牲にしても守るべきものがある」ということである。守るべきものとは土着の民である。国ではない。無告の民ともいう。土着は七人の侍の憧れであった。「七人の侍」の作者や監督は戦争を知っていたのである。

大吾や仲間の家族は、家の掃除や庭の草取りをしてくれる。草取りはひと仕事である。草の根1本ないまでに草取りをして帰るが、しばらくして訪ねてみれば草ぼうぼうである。「雑草のごとく」といった言葉があるが、確かに雑草は根強い。

知覧の家の古民家再生もやっと完了して、知覧の人と囲炉裏で焼酎を飲んでいた。知覧は夏でも焼酎はお湯割りで飲む。「ああ、庭のあそこには井戸があったど」。「なんだ」である。神は、怒ると火の神よりも水の神が怖いという。すぐにふさいである井戸を開けた。しかし、その井戸でスイカを丸ごと冷やして食うのはぜいたくの極みである。「サザエさん」にも一家でスイカに包丁を入れるシーンがあった。家族円満の象徴なのである。

（松浦市出身）